創作・万葉能「琴娘子」について

令和4年6月　有田百代

「気持ちには温度があるの。
人様からよくしていただいた時は、感謝の気持ちをすぐにあらわしなさい。
お礼状は、嬉しい気持ちの温度が熱いうち、すぐに書く。後ではだめ。
はい、ペンをどうぞ。」

遊びたくて「後でいい？」という私に、母はいつもこう言っていました。

頂き物ひとつにも、
自分を思い出してくれたこと、貴重な時間をつかって用意くださっていること。
それがどんなに有難く幸せなことかと、大人になった今、身に沁みて感じます。
「こんなに嬉しい気持ち、きちんと伝えられているかな？」と
いつも思いながら、お礼の手紙を書いたりメールを考えたりしています。

そのようななか、
ご講義　～因幡国からの帰京（第83回）～　にて、
心惹かれる素晴らしいお礼状に出逢うことができました。

『跪(ひざまつ)きて芳音(ほうおん)を承り、嘉くわん交深(こもごも)し。
乃ち龍門(すなわちりょうもん)の恩の、復蓬身(またほうしん)の上に厚きを知りぬ。恋ひ望む殊念、常の心に百倍せり。
謹みて白雲のうたに和へて、野鄙(やひ)の歌を奏(たてまつ)る。
房前謹みて状(まを)す。
謹空　伏してお手紙を賜り、感じ喜ぶ気持ちはこもごもに深うございます。
高貴の君の恩顧がまたさらにこの卑しい身の上に厚い事を知りました。
お目にかかりたい想いは日頃の百倍もしております。謹んで白雲のたつ筑紫から届いたお歌に唱和して、拙い歌を申し上げます。
房前、謹んで申し上げます。
「言問はぬ木にもありとも我が背子が手馴(たな)れの御琴地(みことつち)に置かめやも」
ことば語らぬ木であっても、あなたの弾きなれた御琴を地上に置くなど、粗末に誰がいたしましょうか。』巻5 811・812

天平元年十月七日
大伴旅人から、琴を贈られた人物が書いたものです。

手紙の主は「藤原房前」

「大伴氏」と「藤原氏」
敵対関係と思っていましたので、
ご講義で教わって、両家にこのような付き合いがあったことを知り驚きました。
また大伴家贔屓の私にとって、藤原家にはよいイメージがなかったためか
実直であたたかさ伝わる房前の感謝の念には、いささか驚いてしまいました。

年下とはいえ、官位でいえば旅人の上司にあたる房前です。
「恋望の殊念、常の心の百倍なり。」
こんなにも素直で愛嬌のある表現、どうしたら紡ぎ出せるのでしょう。
藤原房前の人柄が垣間見れた気がしました。
育て上げた母君はいったいどんな方なのだろう、と思い
気がつくと、パソコンを前に時間を忘れて、房前の事を調べていました。
すると、香川県・志度の浦にまつわる「海女の玉取り伝説」に出逢いました。

～その昔。唐に嫁いだ藤原鎌足の娘、白光は亡き父の供養として数々の宝を
兄、藤原不比等に届けようとしました。
ところが、宝を積んだ船が志度の浦にさしかかった時に嵐が起こり
中国に二つとない貴重な「面向不背の玉」が龍神に奪われてしまいます。

不比等はこの玉を取り戻すため、身分を隠して志度の浦へ。
ここで漁師の娘であった海女と恋に落ち、子を授かります。
「房前」と名付け、家族で幸せに暮らしたのも束の間、
不比等が志度に来た理由を知った海女は、愛する夫のため死を覚悟で海へ潜ります。
無惨な姿となって戻り、命果ててしまった海女の、その縦横に切られた乳房には、
取り戻した「面向不背の玉」が隠されていたのでした。
のちに大臣にまで上りつめた房前は、志度寺を訪れ
千基の石塔を建立し亡き母の菩提を弔いました。～

こんなにも慈悲深い母のもとに生まれたからこそ、
房前は立派な人に育ったのでしょうか。
手紙から読み取れた房前の人格から、この伝説は本当かもしれないと思えました。
この悲しくも美しい伝説、既に世阿弥によって「海女」という謡曲にされています。
竜神と激しく闘う鬼気迫る母の姿を描いた「玉の段」は静かなる迫力です。

世阿弥先輩に先を越されてしまった……とは随分勝手な生意気ですが、
「海女」が既に能になっているのなら、
私も房前をモデルに能を作ってみたい、
「大伴氏　対　藤原氏」ではない、両家の友情を描いてみたいと思いました。

中国の古い言葉に
「知音の仲」というものがあります。
自分にしかわからない琴の音を理解してくれた、
唯一無二の友を亡くした哀しみを言い表したものだそうです。

まさにこの言葉の通り、「大伴氏と藤原氏」
琴が取り持つ縁に「知音の仲」の祈りを込めて、万葉能を作りました。

創作・万葉能　　「琴娘子」

三番目物
▷前シテ　娘子
▷後シテ　琴娘子（木の精霊）
▷ワキ　　大伴永主・藤原永継

藤原種継暗殺の首謀犯とされた父、大伴家持の亡骸とともに
隠岐島へ流罪の刑となった大伴永主。

流罪となる前夜。
海岸佇む永主の前に、琴を持つひとりの男が現れた。
男は、名を「永継」と名乗った。

永継が言う。

「私は、父から譲り受けた琴を供に、旅をするものでございます。
あなた様に何としてもお伝えしたい事があり、はるばるとこの地まで参りました。
今からお話すること、さぞ奇異なこととお思いになるでしょう。
ですが、どうかどうか、お聞き入れください。

先日のことです。私は不思議な夢を見ました。
夢に現れた少女が言うのです。

～琴を持ち、今すぐに松江の海沿いへと向かってほしい。
この琴の音を必要とする人がそこにいる。どうか弾いて聴かせてほしい～と。

目覚めた私は、何故だかいてもたっても居られず、急いで琴を背負い
その足でここに出向きました。
あなた様を一目見た瞬間、このお方とすぐにわかりました。
何故でしょう、お懐かしい気持ちがいたしました。

どうか、私の弾く琴の音。お聞き入れいただけませんでしょうか。」

経緯を聞いた永主は、怪訝な顔をしたものの、男の申し出を受け入れた。
永継の醸し出した琴の音色は、
その奇異な話にも関わらず、永主の不安な心に寄り添うような
それは温かく、優しいものであった。

「貴方さまがお弾きになる琴の音は、なんとお優しいのでしょう。
あたたかな音色に包まれ、私の不安な心が溶かされていくようです」

永主は思わず、自分が流罪の身であることを永継に話した。

永継は黙ったまましっかりと永主を見守り、話を聴き終わると
永主を癒すかの如く、琴を弾き続けた。
永主は、しばらく音に身を任せた。
涙が頬をつたう。
ふと月明かり眩しく顔を上げた。

そこへ、
琴の音に惹き寄せられたように美しい娘子が現れる。
月明かりに照らされた娘子が、音色に合わせ、たおやかに舞を舞った。
それは幻想的な世界を生んだ。

急に、琴の音が止む。

永主が振り返ると、
永継が、驚いた様子で琴を弾く手を止め、目を見張っていた。

「そなた、いったい・・・・・」

舞う娘子が、夢に出てきた少女、そのものであったのだ。

「今申し上げようとも、きっと信じてはいただけぬことでしょう。」
娘子が言う。

「おふたりは、出逢うべくして出逢ったおふたり。
　そうして私も今、この場に居合わせることができました。
　長い月日を経た、奇跡のお話でございます。
　もしもお聞き入れくださるのであれば
　夜明け前、この場所にいらしてください。
　私から、あなた様がたにお話をさせていただきたく思います。」

＜中入り＞

まもなく夜が明ける。

娘子に言われた通り
永主、永継は海岸に戻り着いた。
そこへ娘子も現れた。

「いらしてくださいましたね」と言うと
娘子は、古い二通の書簡を袖から取り出し、ゆっくりと読み上げた。

～～

大伴淡等(たびと)　謹みて状(まを)す
ご桐の日本琴(やまとこと)一面　　対馬(つしま)の結ふ石山の孫枝(ひこえ)なり

この琴夢(いめ)に娘子に化(な)りていはく、
「余(われ)根を遙島(えうたう)の崇(たか)き巒(みね)に託(つ)け、幹(から)を九陽の休(よ)き光にほす。長く煙霞を帯らして、
山川の阿(くま)に逍遥し、遠く風波を望みて、雁木(がんぼく)の間に出入りす。
ただ百年の後に、空しくこうがくに朽ちむことを恐るるのみ。
偶(たまたま)に良き匠に遭ひて散(けず)られて小琴と為る。質のあらく音の少(とも)しきを顧みず、恒に
君子(うまひと)の左琴(さきん)を希(ねが)ふ」といへり。即ち歌ひて日はく
この琴が夢の中で少女となって次のように語りました。
「私は根を沖遠き島の高山にのばし、幹を太陽の美しい光にさらしてきました。
長く、雲や霞を纏い、山川の中に心を遊ばせ、遠く風や波を望み見ては、役に立つとも
立たぬともなく過ごしていたのです。ただ、その生涯を終えて、
空しく谷間に朽ち果てるのだろうかと、不安には思っていました。
ところがたまたま立派な細工師に出逢い、
削られてささやかな琴になりました。質も悪く、良い音も出ない我が身も顧みず、常に
立派な方の愛用の琴となりたいと思っています。」と。
ついでに少女は次のように歌いました。
～いかにあらむ日の時にかも声知らむ人の膝の上わが枕かむ～
～いつの日にか私の音色を理解してくれる人の膝の上に、私は枕するのでしょうか～

僕(われ)、詩詠(うた)に報へて日はく

～言問(ことと)はぬ樹にはありともうるはしき君が手馴(たな)れの琴にしあるべし～
～言葉を言わぬ木ではあっても、
あなたは、すぐれたお方が愛用される琴のはずです。～

琴の娘子答へて日はく
琴の少女は答えていいました。

「敬みて徳音(とくいん)を奉はりぬ。幸甚(かうじん)幸甚」
「謹んでお言葉をお受けいたします。しあわせなことでございます。」

といへり。片時(しまらく)にして覚(おどろ)き、すなはち夢の言に感じ、かい然として止黙(もだ)をるを得ず。
故公(かれおおやけ) 使ひに附けて、いささか進御(たてまつ)る。『謹みて状(まを)す。不具』
ほんのわずかなの間で私は目を覚まし、すぐ夢の中の少女の言葉に感動し、感激のあまり黙っていることができませんでしたので、公用の使いにことづけて、たわむれに献上します。
「謹んで申し上げます。　不具。」
天平元年　十月七日　使ひに附けて、進上(たてまつ)る。
謹通　　中衛高明閣下　　謹空
〜〜

ひざまづきて芳音(はうおん)を承り、嘉くわん交深(こもごも)し。乃ち龍門(すなわちりょうもん)の恩、
また蓬身(ほうしん)の上に厚きことを知りぬ。恋ひ望む殊念、常の心の百倍せり。
謹みて白雲のうたに和へて、野鄙(やひ)の歌を奏(たてまつ)る。
房前謹みて状(まを)す。
謹空　伏してお手紙を賜り、感じ喜ぶ気持ちはこもごもに深うございます。
高貴の君の恩顧がまたさらにこの卑しい身の上に厚い事を知りました。
お目にかかりたい想いは日頃の百倍もしております。
謹んで白雲のたつ筑紫から届いたお歌に唱和して、拙い歌を申し上げます。
房前、謹んで申し上げます。

「言問はぬ木にもありとも我が背子が手馴(たな)れの御琴地(みことつち)に置かめやも」
ことば語らぬ木であっても、あなたの弾きなれた御琴を地上に置くなど、粗末に誰がいたしましょうか。

十一月八日　還る使の大藍に附す

〜〜

深い静寂ののち、娘子が口を開く

ご理解いただけましたでしょうか。
この書簡は、あなた方のおじいさま
大伴旅人さまと藤原房前さまとのやりとりの書でございます。

そして私は、旅人様の作られた物語に描かれていた娘子でございます。
役に立つとも立たぬとも、
自分のあるべき場所を探し求め
いったいどれだけの時を過ごしたことでしょうか。
長きの間、この地を彷徨っておりました。

永継さま。藤原永継さま。
ええ、今すぐには、呑み込むには難いことかもしれませぬ、
ですが、この話に出てくる娘子は、紛れもなくこの私のこと。
使命をお与えくださった旅人様の手によって、
あなたさまのおじいさま、藤原房前さまのもとへと旅立ちました。

永主さま、大伴永主さま。
あなたさまのおじいさま、大伴旅人さまは、
それは深く大きなお考えをお持ちの方でございました。
子の、孫の、そのゆく先の代まで、想いを馳せ、考えていらっしゃいました。
これからの世を、とても案じておられました。
大伴と藤原。
いずれ敵対する日が来るであろうと。
いつか、自分が送ったこの琴が、縁をとりもて、寄り添えと。
祈る想いでいらっしゃいました。
房前さまへとお出しになった書簡は、そのあらわれでございましょう。

自分がいったい何者かと、迷い悩む長いときを私は過ごして参りました。
けれども、琴となって命吹き込まれ、お二人のご縁を結ぶことができました。
今はただただ、使命を果たせたこと。ありがたい想いでございます。
どうかどうか、ご無事でいらしてください。永主さま。」

娘子は、夜明けとともに姿をなくした。

まもなく旅立たねばならぬ永主へ、永継が力を込めて言った。

「永主様。どうか、この琴をお持ちください。
その音色は、必ずや、あなたさまのお心の助けになる時がまいりましょう。
そしてお祖父さまの旅人さまが必ずや、あなたさまをお守りくださることでしょう。
魍魎と化した政治の世界。自分には権威権力など無用、戻りはするまいと
覚悟の上で放浪を選んだ私でございます。
都への想いなど、とっくに断ち切っておりました。

けれども私はたったいま、考えを改めることにいたします。
都へ戻ります。
あなたさまと、お父さまの無念を晴らすこと。
これが私に与えられた真の使命なのでございましょう。
旅人さまより、そう託された気がいたします。
娘子同様に、私に使命をお与え下さったこと感謝いたします。
この永継、必ずや、あなた様をお救いいたしますこと、お約束いたします。

祖父が受けたご恩を、お返し致すときがきたのでございます。
どうかどうかご無事で…
必ずやご無事で。

（船の上）

永主が琴の箱をあけると
娘子が持っていたはずの書簡が入っていた。

改めて読み上げる。

「余根(われ)を遙島(えうたう)の崇(たか)き巒(みね)に託(つ)け、幹(から)を九陽の休(よ)き光にほす。長く煙霞を帯らして、
山川の阿(くま)に逍遥し、遠く風波を望みて、雁木(がんぼく)の間に出入りす。
ただ百年の後に、空しくこうがくに朽ちむことを恐るるのみ。
偶(たまたま)に良き匠に遭ひて散(けず)られて小琴と為る。質のあらく音の少(とも)しきを顧みず、恒に
君子(うまひと)の左琴(さきん)を希(ねが)ふ」といへり。

流罪となって、虚しく朽ち果てようとしていたこの身でも、
必ずや生き抜いてみせると決心する永主がいた。

～あとがき～

『余根(われ)を遙島(えうたう)の崇(たか)き巒(みね)に託(つ)け、幹(から)を九陽の休(よ)き光にほす。長く煙霞を帯らして　山川の阿(くま)に逍遥し、遠く風波を望みて、雁木(がんぼく)の間に出入りす。
ただ百年の後に、空しくこうがくに朽ちむことを恐るるのみ。』

旅人が房前へ宛てた書簡の物語には、
大宰府で妻を亡くし、心彷徨わせる旅人自身の心情が重なっているように思いました。

己の行方と共に、大伴家の行方、世の行く末を案じる旅人。
「自分の子は孫は、いかなる道を歩むのか。次の世に自分が残せることは何だろうか」

旅人の心の声が聞こえくるようです。

時を超え・・

大伴旅人の孫であり、家持の子にあたる「大伴永主」は
大納言の祖父や中納言の父のように大きな出世をせぬまま
藤原種継暗殺の首謀者とされた父・大伴家持に連座し、
その亡骸とともに流罪の身となります。

また、旅人より琴を送られた藤原房前の孫であり、真楯の息子「藤原永継」も
太政大臣の祖父や、大納言の父のような大きな出世は望めぬままでした。

「永主と永継」

年代に10年程の差はあるものの
大伴家と藤原家という名門に生まれ、
共に官位・従五位以下という共通点に何かしら、通ずる縁を感じます。
史実には、ふたりのその後の消息は残ってはいないようですが
後の大伴家持復位の裏に、恩赦とは別の理由があるとするなら…

都へ戻った永継が、
「藤原氏と大伴氏」祖父たちが培った両家の友情を取り戻すべく、奔走したのでは。

　私の願いを、歴史のロマンに託します。